



# 白門板橋

2013. 3. 15 VOL.39

編集  
発行

中央大学学員会 東京板橋区支部

〒173-0035 東京都板橋区大谷口1-39-2 TEL03-3956-9054



■新春メッセージ——

## 支部創立25周年を祝おう

支部長 石塚 輝雄

新年明けまして、おめでとうございます。  
皆様には日頃、支部の運営に格別のご支援をいただき心からお礼申し上げます。

さて、今年六月に当支部は創立25周年を迎えます。先人の皆様方のご尽力により、四分の一世紀という節目の年を迎えることができました。私たちは、この築かれた歴史を引継ぎ、さらなる発展を遂げるための誓いと、歴史を刻んだ多くの皆様のご労苦に感謝し、新たな出発をしたいと思えます。

このような思いを込めて、記念事業を開催すべく、昨年十月に創立25周年記念事業実行委員会を組織し、既に準備に入りました。委員会の方々を中心に総員で記念事業を成功させましょう。

支部創立の年を振り返りますと、青函トンネルの開通、瀬戸大橋の開通などインフラ整備が進む中で、リクルート疑惑が発覚し、その解明が始まりますが、竹下内閣は景気よく全国の市町村に一律一億円を「ふるさと創生」資金として配分を決定しています。

しかし、ふるさと創生を願って断行した政策を置き土産に政権の座から降りた竹下首相を惜しむ声は、聞かれませんでした。

波乱に満ちた昭和の終りから、元号の改った平成の世を二十五年にわたり、歴史を刻んできたことには、お互いに祝福し合ってよいのではないのでしょうか——。

節目の年に当り、今後の事業の進め方に、次のような提案をした  
いと思えます。それは、板橋区文化団体連合会との連携です。現在、  
26の連盟により構成されて、その活動は充実しています。

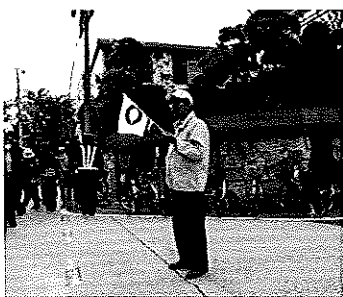
従来からの支部活動は継続しながら、板橋区の地域活動との連携  
は、支部活動を大きく進化させるのではないかと思います。

## 支部のニュース

### 区民まつりで新入会員募集

平成24年10月20日(土)～21日(日)の両日「板橋区民まつり」が開催されました。

参加抽選会に2年連続で外れ、落胆していたところ、日大人桜門会Vの協力を得て、会場近くに受付場所を確保することができ、新入会員募集のため参加するようになりました。



▲会員を募る大野事務局長

石塚支部長・池田幹事長をはじめ、各ブロックの方々の積極的な参加を得て、新たに多数の新入会員を迎えることが出来ました。

ご協力ありがとうございました。

(大野正浩)

(新入会員名は5ページに記載)

### 秋の旅行は奥松島を訪問

昨秋の旅行は、11月3日～4日、参加者20人でバスに乗り、宮城県奥松島を訪ねました。3日は青葉城を見学。4日は遊覧船で松島湾の美観を堪能。その後、東松島市野蒜地区を訪問。

大震災のすさまじい爪痕を目のあたりにし、困難にもめげずに生きる門馬さんご夫妻(ガイド)の体談話を聞き、また現地行政の責任者、東松島市阿部市長(中大出身)にもお会いして、少ない職員と共に復興に励む貴重なお話を伺いました。

紀行文は、旅行委員(川崎力男、松島道昌、鈴木裕の各氏)を代表して鈴木さんが執筆しました。6ページに掲載してあります。

### 第21回ホームカミングデー

10月28日(日)、第21回中央大学ホームカミングデーが開催されました。

今回の開催は、一昨年在創立125周年記念式典と重なり、昨年在「東日本大震災」のため自粛でしたの

で、3年ぶりとなりました。

板橋支部からは、用意されたバスあるいは電車で20数名が参加。メイン広場に支部ののぼり旗を掲げて盛り上げました。

メインステージの応援団の演技、オーケストラや和太鼓の演奏、書道のパフォーマンス等々、現役学生の熱気を十分に感じながら、他支部との交流も行いました。



▲府木応援団長を囲んで

また「中央の絆」の企画で、海外の支部を含め、多数の支部が支部旗を持ってメインステージに集結し、応援団のエールを受け、学員会支部の絆をより太くしました。

多数の模擬店、福引、運動部の公開練習、大学史等の展示場を訪ね、「白門のふるさと」に浸ることができた一日でした。(三宅正代)

### 新春の集い

中央大学校歌のBGMが流れる中、新春の集いが1月26日(土)午後6時から区立文化会館大会議室において開催されました。

今年は寒さのせいか、例年より少ない出席者数でしたが、はじめに石塚支部長から母校の動向の報告と当支部25周年記念事業計画を兼ねた挨拶をいただき、続いて佐藤道則相談役の発声で乾杯、懇親会に移りました。



▲佐藤相談役の「乾杯！」

初参加者2名の自己紹介、しばらく歓談に入り、今年の観桜会の担当である常盤台ブロックの深山副支部長から案内があり、宴半ばよりカラオケを楽しんだ後、中三川常任幹事のリードで校歌、応援歌、惜別の歌を輪になって合唱し、三本締めでお開きとなりました。

(池田互利)

# 母校のニュース

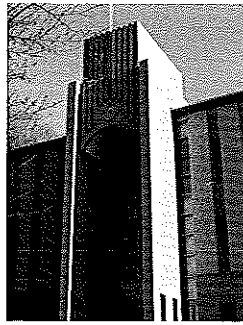
## ■司法試験合格者第一位

昨年の司法試験で中大は二〇二名の合格者を出し、六年ぶり首位になりました。以下

第二位 東大 一九四名

第三位 慶大 一八六名

なお中大の学部出身の合格者は他大学法科大学院及び予備試験を経て合格した者を含め、一四二名でした。



▲炎の塔(写真提供:中大)

## ■箱根駅伝は無念の途中棄権

新春の箱根駅伝は、五区の山上市で途中棄権し、二十八年間続いたシード権を逃しました。

途中棄権は、八十七回の中大箱根駅伝史上初めての不名誉な出来ごとでした。

大会終了後、浦田監督は敗因について、体力的、精神的にも耐え

て戦いきる選手の育成ができなかったこと、また駅伝で大切な厳しさのあるチームワークを作れなかったと反省し、来年は予選会をトップ通過し、九十回大会に出場しますと語っていました。

## ■入学志願者二年連続で減少

昨年一二〇〇名減らした入学者は、今年さらに二〇〇〇名余り減少し、八二〇〇〇名余り(後期試験は想定数)になりました。

予備校関係者によりますと、減少の原因は地方志向が強くなり、逆に地方からの受験生の減少の影響の少ない東海や近畿の大学で、受験者を増やしているとしています。ちなみに受験者ベスト5は、

- ① 明大 一〇九三二名▲四〇〇八名減
- ② 早大 一〇六七八名▲一七五九名減
- ③ 法大 八九〇四七名△三九一八名増
- ④ 近大 八一九九一名△三四七名増
- ⑤ 中大 八七一四名▲三二六名減

(後期試験は含まず)

## ■足立直樹氏、新理事長に就任

学校法人中央大学は、昨年十月二十九日開催の理事会において、久野修理事長を解任し、新たに足立直樹氏(法37卒・凸版印刷株

式会社・会長)を理事長に選任しました。



▲足立新理事長(写真提供:中大)

久野氏は、昨年の中央大学横浜山手中学校の入試不正事案に関与したにもかかわらず、責任を認めず、理事会をはじめ学園全体の運営を混乱させたことから、久野氏が法人の経営責任者であることが経営上不適格であるとしております。なお久野氏は、学員会会長と学校法人理事を兼務しております。

## ■硬式野球部春季リーグ戦展望

昨秋シーズンは、亜大の突出した強さに圧倒され、日ハム入りした鍵谷投手等の頑張りもありましたが、緒戦の国学院大戦に連敗したのが祟り、後半追いあげたにもかかわらず変わらず惜しくも二位に終わりました。春季シーズンでは、最終戦で好投し勝利をあげた上田晃平投手と同期の島袋洋奨投手、さらに打撃陣の頑張りに期待し、夢を実現してほしいと思います。

(栗原三郎)

## TOPICS 大相撲初場所観戦

まだ寒の明けない1月19日(土)午後2時30分、両国駅前「板橋白門会」と「白門四一会」の仲間18名が集合して、中大出身の豪風の応援を兼ねて、大相撲7日目を観戦しました。

豪風は元大関の雅山と対戦し、送り出しで勝ちました。



▲やぐら太鼓(写真:伊藤)

観戦後、駅前の料理屋「花の舞」でちゃんこ料理の小宴会を開き、触れ太鼓や相撲甚句を聞き、また、力士ものまねの芸を見ながらお酒をくみ交わし、親睦を深めました。

中大出身で初の部屋持ちの片男波親方(元関脇、玉春日)の部屋の力士、玉飛鳥と玉鷲も幕内で健闘しています。

(池田亘利)

# 告知板

①

## 支部創立25周年事業の概要 について

\* 平山惟美 \*

今年六月に支部創立25周年を迎えますが、夫婦が結婚後25年目に行う記念祝賀と同じように、縁あって白門を潜って学び合った仲間の集りが、四分の一世紀に当る25年という歳月を刻み、漸く会員同志の絆も深まったとして、お互いに祝福し合うことに大きな意義があります。

西暦では、百年を二単位として区切って数え、一世紀、半世紀、四分の一世紀などの節目を祝う風習があります。

昨年十月二十六日に開催された臨時常任幹事会で、次のとおり記念事業の概要と実行委員会が組織され、責任者が選任されました。

### 一 記念事業

- ・ 記念講演会の開催(大学提携)
- ・ 記念品の配布
- ・ 功労者への感謝状贈呈
- ・ 記念祝賀会の開催
- ・ 会報・記念増刊号発行

### 二 日時と会場

- ・ 六月二十二日(土)
- ・ 午後四時～八時三十分(予定)
- ・ 池袋東武百貨店14階

### 三 来賓等招待者

- ・ ヴァンケットホール
- ・ 大学及び学生会本部
- ・ 都区区内学員会支部
- ・ 板橋区役所 他

### 四 協賛金基準

記念事業を実施するために、過去にお願いした基準と同額にし、次のとおり決定致しました。  
『白門板橋』春季号郵送の際に依頼書及び「払込取扱票」を同封致しますので、よろしくご協力をお願い申し上げます。

### 記

支部創立25周年記念事業協賛金基準

- ・ 一般会員 一口(三千元)以上
- ・ 幹事会員 二口以上
- ・ 常任幹事以上 三口以上

※ タイムスケジュール(予定)

- ・ 一定時総会(4時～4時30分)
- ・ 二記念講演(4時40分～6時)
- ・ 三創立25周年記念式典(6時～6時30分)(記念撮影)
- ・ 四記念祝賀会・懇親会(6時30分～8時30分)

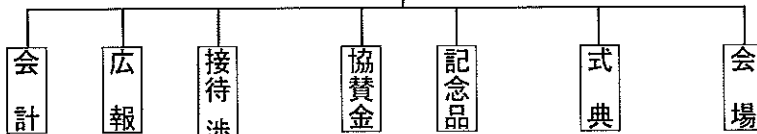
- ・ アトラクション
- ・ カラオケ等

### 五 記念事業実行委員会の組織と業務

(担当者内の\*ゴシックは責任者)

実行委員長(石塚)・副委員長(平山)

事務局(大野)



会場選定、当日の設営、受付、看板、放送機器、BGM、支部旗

(\* 深山・松島・大野)

式次第、演壇、感謝状、式進行

(\* 松島・深山・大野)

講演、総会、記念式典

(\* 中三川・徳永)

記念品の調達、名入れ、配布

(\* 池田・須田・小宮)

協賛基準設定、依頼、

入金口座、振込票

(\* 須田・\* 三宅)

来賓等招待者の接待、手土産

(\* 平山・前田・伊藤)

広報誌増大号、HP、記念写真

(\* 小宮)

記念事業の収支決算

(注) 定時総会及び懇親会は、併行して実施

(注) 定時総会及び懇親会は、併行して実施

告知板 ②

平成24年の忘年会は  
飲み放題で年忘れ

平成24年を締めくくる当支部の忘年会は、12月8日(土)、上板橋の「庄や」において実施されました。

今回の担当は、徳丸ブロックで、世話人は、吉野昭一ブロック長、笠原優、藤野守さん。

出席者は会員39人が出席。石塚支部長の挨拶、笹原優さんの乾杯の音頭のあとは、会場が和室で鍋料理だったことも影響して、膝を交えての懇親となりました。

久しぶりの和食で座る宴会、これもなかなか風情があります。

新入会員の伊藤元太郎さん、乙女幸廣さん、平田豊さんの紹介もあり、入会の経緯や抱負などが語られました。

お開きの挨拶は大久保隆輔さん、そして全員が輪になって中大校歌など三曲の合唱、最後は岡田利彦さんの発声で豪快な三本締め。二次会は、近くのカラオケ店に場所を移して、歌を歌って年忘れ。それっ、来年も頑張るぞおっ。

観桜会のご案内

恒例の当支部の観桜会を、次の要領にて実施いたします。

日 時 平成25年4月6日(土)  
集合時間 正午

集合場所 東上線・ときわ台駅

散 策 北口ロータリー

懇親会場 石神井川の桜並木

会 費 中華料理「和唐」

担 当 五〇〇〇円

常盤台ブロック

(詳細は、同封の観桜会の案内状をご覧ください)

新入会員(敬称略)

○平田 豊 (昭49商)

趣味 旅行

○大平雅大 (昭55理)

趣味 トライアスロン

○矢上俊男 (平5法)

趣味 ゴルフ

○望月純門 (昭63)

趣味 音楽

○乙女幸廣 (昭54経)

○伊藤元太郎 (昭34法)

○畑井友里枝 (平11法)

新入会員の皆さんようこそ、仲良くやっていきましょう。

(大野正浩)

白門レガッタで  
当支部チームが再び入賞

平成24年11月18日(日)戸田オリンピックボートコースで開催された白門レガッタ(二〇二二年度白門レガッタ実行委員会主催)で「板橋白門会ブリッジチーム」(笹沼・小宮・布施の3選手、パウと舵手は本部より参加)は、一般男子組(5チーム)に出場、堂々1位に入賞しました。

当日はとても良い天気でしたが、風が強く、気温の低い日中のため、午後の部は早めに競技終了。

板橋白門会でチームリーダーを務める小宮仁さん(写真)に、優勝の感想を取材しました。



「ボートとの出会いは、数年前に板橋白門会に「中大ボート部を愛する会」というのがあり、ボート部学生の公式戦の応援を行っていました。

白門レガッタが開催された際、出場の誘いを受け、それまで水上スポーツの経験はありませんでしたが、競技に挑戦することにいたしました。

最初はローイング技術を全く持っていないだったので、早く身につけなければとの思いで練習場に向かうのですが、乗艇して着座しても、頭で描くイメージを体がそのようには動いてくれない、上手くは漕げませんでした。楽しくボートに乗っておりました。

水の上から見る景色は、陸上のものとは違い、新たな発見がありました。手のひらに水を入れて、自然の感触を味わい、良い体験ができました。

現在はナックルフォアですが、数年後には、板橋白門チームで、エイト艇を漕げるレベルまで持っていきたいと思っています」

(取材・文責 伊藤 潤)

訃報

▼岡田公弘氏(昭37商)

平成24年9月15日逝去

▼関 正夫氏(昭12商)

平成25年1月31日逝去

ここに謹んでお悔やみ申し上げます。(事務局)

# 秋の旅 『奥松島を訪ねて』

鈴木 裕

2011年3月11日の大震災で、私が知り合った岩手県の友人は、詩集を送ってきました。「心にいつも太陽を 冬は必ず春となる 明日を信じて 頑張っぺし 夢をつかむその日まで 何が何でも 頑張っぺし 頑張っぺし」(出典・中村博興著・詩集『いのちの詩(うた)』より・自費出版)

## 仙台に向かって出発

11月3日7時35分、グリーンホール前より参加者20名を乗せたバスは、仙台・松島へ向って出発。

恒例の後部サロン席は、早くも宴会を開始。首都高速から東北自動車道へと入り、秋の紅葉を楽しみながらの快適な走行のほすが、行楽地へ向かう車で突然の大渋滞。

楽しみにしていた仙台・青葉城「本丸会館」で昼食の「はらこめし」を口にしたのは、午後2時半過ぎ。でも鮭とイクラの丼は美味かった。

昼食後、青葉城址へ行き、地元仙台市街ガイドの小林さんの案内で、伊達正宗騎馬像などを見学。青葉城

址は、青葉山丘陵にあり、城址から見た市街一望に感激しました。

日が暮れてきたので、長いバス行程で疲れた体を一刻も早く解こうと、宿泊先の「ホテル松島大観荘」に向かいました。

部屋に荷を下ろすなり、全員一目散に豊かな湯量の大浴場や露天風呂に入り、体全身をつかり、疲れを吹っ飛ばし、大宴会の会場に。

宴会は、岩野先輩の乾杯の音頭で始まり、美味しい松島の郷土料理とお酒で昼の疲れも一気に解消。先輩、後輩の分け隔てなく、随所で談笑がはずみ、時の経つのも忘れて、充実した宴となりました。

そして恒例のカラオケ大会。矢部さんが歌う、被災地で歌われている「明日の詩」に涙。

最後は、全員で肩を組み大合唱。

## 松島湾遊覧と被災地訪問

翌朝は、予定より少し早目の出発で、二日目の行程を開始。

初めに、日本三景の松島を訪れ、高速遊覧船で約40分、鐘島・仁王島・桂島など、餌に寄りつくカモメと一緒に島めぐりでした。

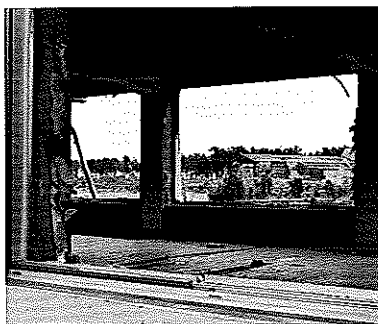
次に平安の武官、坂上田村麻呂

が建立した五大堂を見学。毘沙門天に五大明王像を祀った建物です。

いよいよバスは、奥松島の被災地に向かいました。JR野蒜駅で、地元のガイド門馬満枝さんと合流。

門馬さん自身も家を津波で流され、今は仮設住宅に住まわれて、厳しい生活環境の中でボランティアをされています。

車窓から見える街の被害状況の酷さに交わす言葉もありません。私達の想像をはるかに超えた状況でした。



▲鳴瀬第二中学校跡 (写真：伊藤)

バスが止まったのは、津波で破壊された東松島市立鳴瀬第二中学校跡で、校舎の窓ガラスはメチャクチャに壊され、教室には泥まみれのアルバム、教科書、野球のミットなどが散乱していました。

思わず私は涙し、追善の手を合

わせました。

続いて私達は、大高森のミニ登山を行いました。ガイドは門馬満枝さんのご主人で、ご夫妻でボランティアガイドをされています。山頂からの嵯峨溪と松島湾の眺めはまさに絶景でした。

それから最後の訪問地、我ら白門仲間である阿部秀保東松島市長との面会場所「ちゃんこ萩乃井」に向かいました。

ここで板橋支部として市長に災害見舞金をお渡しし、市長よりお礼のご挨拶と復興への取り組みをお聞きいたしました。

阿部市長は、過去の地震を教訓にさまざまな改善をなされ、瓦礫処理費用の方法は高く評価されてNHKでも報道されました。白門の仲間として誇りに思います。

\*\*\*

充実した旅行の全行程を終え、一路、板橋に向かって走りながら、帰路も延々と続く大渋滞。車内はカラオケボックス状態に。

そして、気が付くと板橋区役所前に無事到着、再会を期しました。さあー皆さん、われわれも「頑張っぺし」でいきましょう。

■白門作家シリーズ

米長邦雄 文学拾い読み

『われ敗れたり』

—コンピュータ将棋のすべてを語る—

出版社／中央公論新社  
著者／米長邦雄

著者プロフィール

将棋棋士、日本将棋連盟会長。  
歴代七位の通算一一〇三勝を挙げ、  
二〇〇三年現役を引退した。  
一九四三年山梨県生まれ、佐瀬  
勇次門下、五九年初段、七九年九  
段。中大中退。

棋聖の他に名人・十段・王位・  
王将・棋王など多数のタイトルを  
持ち、「永世棋聖」の称号を持つ。  
名人を含むタイトル獲得通算十九  
期は、歴代五位。  
二〇〇五年から日本将棋連盟会  
長に就任。

昨年十二月十八日、前立腺ガン  
で死去。享年六十九歳。  
著書に『人間における勝負の研究』  
『不運のすすめ』など。

著者・米長邦雄氏は、誰もが知る元将棋棋士。それも永世棋聖という最も格式の高い称号を持つ将棋界の功労者。

将棋棋士を本業とした米長氏が著した書物を「文学」として取り上げることに異論がありそうだが本書以外にも多数著書を出して、将棋に関する評論であったり、勝負に関する随筆であったりするのは、立派な文学として捉え、訃報を機会に本コーナーで紹介することにしました。

本書は、昨年一月十四日に開催された第一回将棋電王戦の敗戦記を八章に分けて綴っています。目次を眺めると記述の大枠が見えてくるので紹介します。

- 第一章 人間を凌駕しようとするコンピュータソフト
- 第二章 先手6二玉への道
- 第三章 決戦に向けて
- 第四章 1月14日、千駄谷の戦い
- 第五章 記者会見全文
- 第六章 コンピュータ対人間、新しい時代の幕開け

第七章 自戦解説

第八章 棋士、そして将棋ソフト開発者の感想

ト開発者の感想

第七章の自戦解説は、将棋には門外漢の私にはよく理解できなかったが、他の部分では対決に備えた研究の様子、それも相手の方が強いことを認め、勝つための対策を練る様子がコンピュータとの練習対局を含めて、詳細に書かれています。

一秒間に一八〇〇万手を読むコンピュータには、過去のプロ棋士の対局した棋譜がすべて入力されていることを聞いて恐ろしさを感じますが、何故この化物のような機械を相手に将棋連盟の現職会長が対局を買って出たのか不思議でしたが、「あとがき」を読んで納得

できました。

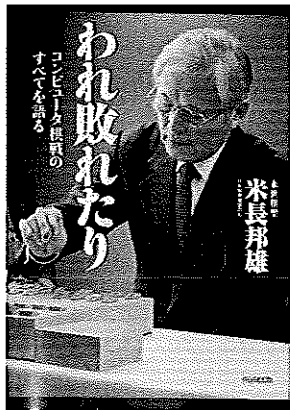
二〇〇九年に前立腺ガンを発症し、毎月一回定期検診を受けながら、六十八歳の肉体に忍び寄る若い、年齢からくる衰えを考え合わせる。その肉体、精神、将棋に対する思いをすべてぶつけてみようというのが今回の対局だったと述懐しています。

そして、本書が将棋界への遺言書になるかも知れないと予言めいた言葉を遺して、昨年12月18日に死の旅に出ました。

記者会見で、「負けたのは、私が弱かったからだ」と述べたことに、勝負の世界に生きた男の潔さと美学を感じました。

かつて、大手生命保険会社の主催した講演会を都内のホテルで聴講した時、米長氏は現役のバリバリで、「勝負の世界」という演題で歯切れのよいメリハリのある講演を聴いたのが、昨日のことのように想い出されました。

当支部の記念講演に縁が持てなかったのは、何とも惜しい気がします。  
(平山惟美)



### 三村の入会地であった三園

三園ができた経緯は、溝下公園内にある土地改良記念碑に書かれています。それによりまずと、三園は旧上赤塚村、下赤塚村、成増村の古くからの入会地であり、その後もそれぞれ別の村の利権が入りまじっていたため、整理後に三園と名付けられたといえます。

### 地名の由来…③

## 「三園」の巻

登記簿で見ますと、昭和四十七年四月老日に換地処分により変更となつています。

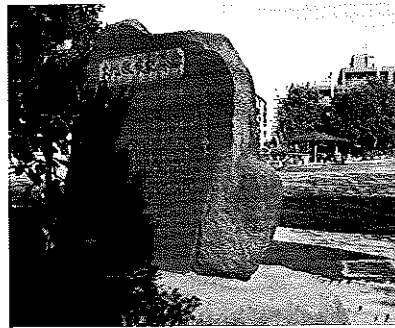
今回は、坂本区長さんにいろいろ教えていただきました。また、安井副区長さんには、資料の提供をしていただきました。

幼い頃、区長さんはお祖父さんに連れられて、土地改良の落成式に行

ったそうです。記念碑が建っていました。まわりは全部田んぼだったといえます。

昔は、生産性の低い水田地帯だったのを、昭和三十五年に土地改良に着手して、三年かけて近代農業にふさわしい農地になったと記念碑に書かれています。

また、三園高島平あたりは人家がなく、まわりは田んぼで建物と



▲土地改良記念碑

いったら船の発着所ぐらいいしかなかったということ。三園高島平あたりが整備されてきたのは、昭和三十八年頃で、ま

ず道ができました。その頃の田んぼは道より一〜二メートル低かったようです。

区長さんのお宅も昔は農業を営んでおられたようですが、昭和四

十年に幼稚園を始められ、昭和四十五年位までは園児のために田んぼで稲を作っていたそうです。

幼稚園のそばには牧場もあり、新河岸川の向こう岸には養豚場もあったとのこと。

また新河岸川には欄干のない橋があり、それを渡るのが怖かったと話されていました。

### 三人の少女の記念碑

溝下公園には、もうひとつの記念碑があります。三人の少女が置かれているのですが、これは三園町一丁目の一部を住宅用地に整理した時の竣工記念碑で、平成元年に建てられました。三園高島平地区は東京オリンピックを境にして、まず道が整えられ、耕地整理がされ、区画整理されて現在のような都市になったようです。

また溝下公園の近くには、みそしの幼稚園、三園小学校があり、この道の両側には街路樹としては珍しいナナカマドが植えられています。夏から秋にかけて赤い実がなり、紅葉が大変美しく、道ゆく人々を和ませています。

(文・写真とも 中三川孝幸)



### \*編集後記\*

●75歳で第148回・芥川賞を受賞した黒田夏子氏、16歳でW杯スキージャンプ大会で総合優勝した高梨沙羅ちゃんとの二人の女性には世の男性ばかりでなく多くの人が元気をもらった。納期を抱えストレスの溜っている編集スタッフには、またとないサプリメントになった。馬齢を重ね高齢化の進捗は何ともし難いが、せめて気持だけは若さを失わず頑張りたい。

(編集長 平山惟美)

●昨春秋の支部の旅行は、宮城県「奥松島を訪ねて」でした。東日本大震災の被災地は、今年で二年目の春を迎えます。震災前、四季折々に美しく花の咲き誇っていた東北の各地が、一日も早く復興されますよう願って止みません。

震災を風化させてはならないとの被災地の人々の訴えを、鈴木裕さんが書き下ろした文章の行間から読み取ってください。

(編集委員 伊藤潤)